



いなもり あやこ
【合同資源みらい賞】 稲森 彩子

お腹を痛めて産んだ我が子の顔が真っ青に染まってきた時、貴女はどんな気持ちでしたか？
生後半を過ぎた頃、私の顔の左側に『太田母斑』と呼ばれる先天性の色素斑が出てきました。
色素の色は日に日に濃くなり、街で私を見た人は皆、口を揃えて「可哀想。」と
言っていましたよね。幼いながらも「私って可哀想なんだな。」と感じていました。
そして、どんどん自分に自信が持てなくなっていました。

貴女はそんな私を、治療設備の整っている遠くの病院まで何度も連れて行ってくれました。
その頃のことをはっきりと覚えているわけではないけれど、辛くて痛くて苦しかった思い出
として、今でも頭に残っています。

成長してからもその頃のことを詳しく聞こうとは思いません。

わざわざ聞き出す機会が無かったというのもあるけれど、なんとなく蓋をしたかったからです。

何度も治療を重ねたおかげで、小学校に入る頃には痣の範囲も小さくなり色も薄くなりました。
今までずっと「どうして私ばかりこんなに辛い思いをしなければいけないのだろう。」と思って
いたけれど、最近になってようやく分かってきました。

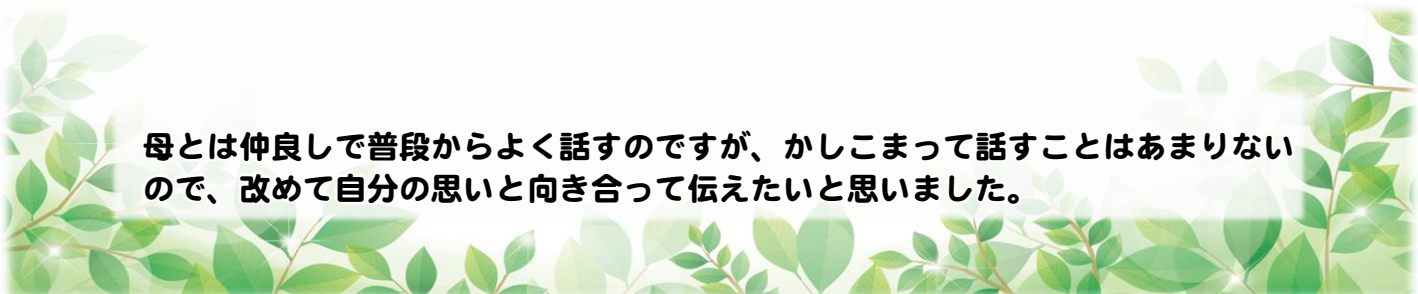
私よりも貴女の方がよっぽど辛かったはずだ、と。

もしかしたら私を産んで後悔したことがあったかもしれません。

こんなに痣だらけの顔なのにたくさん愛情をかけてくれてありがとう。

何があってもいつも味方でいてくれて本当にありがとう。

(大阪府/21歳/女性/大学生)



母とは仲良しで普段からよく話すのですが、かしこまって話すことはあまりないので、改めて自分の思いと向き合って伝えたいと思いました。